

口蓋化した /se/、/ze/ 音節の共通語化に関与する要因について
--- 鳥取市賀露町の社会言語学的調査から ---

前川 喜久雄
池本 伸子

鳥取大学国語学研究室は1987年の夏に鳥取市賀露町(加勢)においてランダムサンプリングによる社会言語学的な調査をおこなった。この調査は音声・文法・語彙・敬語法の各項目からなるが、この発表では音声項目の中心をなすサ行・ザ行の口蓋化について報告する。

1. 賀露調査の目的および先行研究との関係

サ行・ザ行の工段音(以下 /se/・/ze/とする)を [je] [ze] などと口蓋化して発音する方言は東北・山陰・九州を中心に分布している。口蓋化した /se/ /ze/ の共通語化(非口蓋化)については、これまでに国立国語研究所の二度にわたる山形県鶴岡市の調査(1950;1971)や北海道方言研究会による増毛町の調査(1976~7)によって精度の高い資料が得られているが、山陰地方に関してはそのような研究がない。そこでまず第一に知りたいのは「山陰での共通語化には鶴岡と同じモデルがあてはまるか?」ということである。次に、先行両調査では調査項目数が3項目と共に限られており、共通語化に及ぼす各種の社会的要因(インフォーマントに関する要因)の分析に調査の主眼がおかれているようである。賀露調査では /se/ 30項目、/ze/ 15項目と調査語彙を増やすことによって言語体系に関する要因(語彙の要因)が共通語化の進展に及ぼす影響も評価することを試みた。

2. 1 調査地域

賀露町は鳥取市を流れる千代川(セタカワ)の河口に位置する港町であり、旧気高郡賀露村から1937年に鳥取市に編入された。日本海における松葉ガニ漁の一中心地であり、鳥取市の海運の拠点でもある。1987年8月現在で5360人の人口がある。鳥取市の他地域に比べ相対的に漁業人口が多いが、絶対数としては一般の勤労者が大多数を占める。この傾向は市営住宅の建設などにより近年一層強まっている。

2. 2 調査方法

住民票から約4%にあたる206名を等間隔サンプリングで抽出し、そのうち調査不可能と思われる10歳未満の者を除く181名を調査対象者とした。1987年の8月19日から9月17日までに被調査者宅を訪問して面接調査をおこない、可能な限り全調査過程を録音した。144名の方々の協力を得ることができたが、そのうち6名はやむをえない理由で音声の調査をおこなえなかったので138名が以下の報告のインフォーマントである(表1)。今回発表する硬口蓋化に関する調査は主として長短4種の文章のリストを朗読してもらう形でおこなったが、「汗」「風邪」の2項目はリストの他に語彙に関する調査の中でも質問している。リストの一部を下に示す(原文は手書きで縦書き)。文章2はかなり難しいと思われたので小学生(6名)には読んでもらっていない。

- 文章1 私が十歳の時、もうすぐ弟か妹が生まれることを学校の先生に話したら、先生が「布勢の山王さんちゅう神社の神さんに拝むと・・・
- 文章2 一九四五年八月六日の朝、強い閃光と地震のような音が広島のおおい、(中略)熱風による火事は市街一帯を火の海に変化させ、・・・
- 文章3 先日風邪をひいたので、酒に卵と砂糖を入れ、かき混ぜてあたためたものを飲ませてもらった。全快してからぜひもう一度・・・
- 文章4 私は税務署に勤めているせいで、売上税問題に世間の人よりもとても関心がある。(全文)

表1 調査対象者の年齢と性別による分布

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
男	22	9	12	8	6	2	4
女	14	16	12	15	6	6	6
計	36	25	24	23	12	8	10

読みにくい漢字はインフォーマントの要求によって読みを教えていることがある。それ以外には読み間違えや発音のユレがあっても特に訂正することは原則としておこなっていない。録

音した138名の資料は発表者兩名が聴き取りをおこなった。その際、相互にチェックしているが、最終的には前川の判断を優先した。リスト全体に含まれる45箇所の/se/・/ze/の一覧とその言語的環境を表2(末尾に収録)に示す。言語的環境については後に4で説明する。

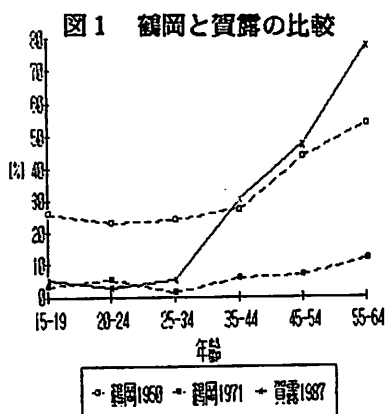
2.3 音声実質の範囲と処理方法

賀露町の/se/・/ze/には次の音声が生じていた。まず/se/に関しては(1)東京方言などのサ行拗音と同じく調音する[ʃe]。(2)くぐもった音色の、そり舌音に似通った[ʃe]。おそらく舌尖を下前歯より離してもちあげ、舌端を後部歯茎に接して発音している子音。(3)[se]と[ʃe]の中間の音で判断に迷う類のもの。(4)東京方言などと同じ標準的な[se](尚この他に1名だけであるが語によって/se/を[tʃe]と発音する60代の女性がいた)。次に/ze/に関しては(1)東京方言などのザ行拗音と同じく調音する[ʒe]もしくは[dʒe]。(2)[de]、及びデに近く聴こえる摩擦部の非常に弱い[dʒe]。(3)[ze] [dze]と[ʒe] [dʒe]の中間の音で判断に迷う類のもの。(4)東京方などと同じ標準的な[ze]もしくは[dze]。今回は第一報として煩雑を避けるために/se/・/ze/共に標準的な発音(4)以外を一括して「なまり」として取り扱い、標準的発音には数量0を「なまり」には数量1を与えて得点化をおこなうことにした。この方が先行研究とも比較し易い。尚、小学生を文章2では除外したことや調査ミス、誤読などによってすべての語彙が138回ずつ発音されてはいない。そこで以下に示す数字はすべて相対化したパーセンテージとする。100%が完全に「なまった」状態、0%が完全な共通語化の状態である。図ではすべて縦軸を口蓋化率にあてている。

3. 社会的要因の分析(インフォーマントの分析)

3.1 「階段型」の共通語化

最初に/se/・/ze/45項目すべてをプールした結果を鶴岡調査と対比して図1に示す。年齢と強い相関(0.72; p<0.01)が認められるのは先行研究と同じであるが鶴岡と比較すると賀露では共通語化があまり進展していないことがわかる。特に



35-44歳以上では1950年時点の鶴岡と比較しても一層口蓋化が強い。しかし、興味深いことに34歳以下では賀露の方が1950年の鶴岡に比べて共通語化しており1971年の鶴岡と大差がない。賀露の共通語化の現状は国研(1974)に言う「凸型」から「下降型」への移行がほぼ完了した段階と言えそうだが、その移行(若者の共通語化)は50代以上を置き去りにした形で独立に急速に進んだものと判断できる。

いわば「下降型」の代わりに40代を境にした「階段型」が生じているのである。この点を明示するために138名すべてのデータを図2に示した。この「階段型」はどのようにして生じたのだろうか? 30代以下に外部から流入した者が多いのではないかと思われたが、

賀露生まれの78名の結果を示した図3からこの可能性は否定される。インフォーマントを各種の社会的属性から分類してみた結果、次のことが判明した。(1)漁業・農業・水産加工業(以下、一次産業と呼ぶ)に携わる人々には「階段型」が生じていない(図4)。一方、会社員・サービス業(以下、三次産業と呼ぶ)にたずさわっている人々には顕著に「階段型」が生じる(図5)。(2)男性と女性とでは女性の方が顕著な「階段型」を示す(図6・7)。(3)外住歴、学歴、TV視聴時間、新聞を読むか等は関係が薄い。(図2~7の横軸は年齢、右端を100歳とした。)

図2 賀露全体(138名)の口蓋化

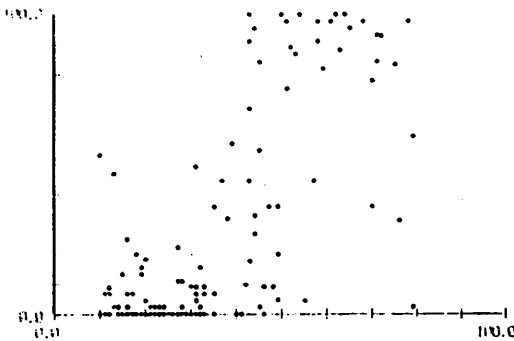


図3 賀露生まれ(78名)の口蓋化

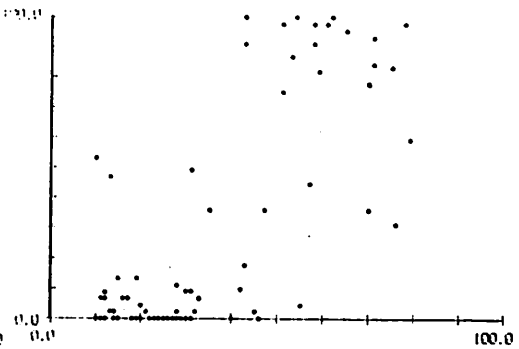


図4 一次産業(12名)の口蓋化

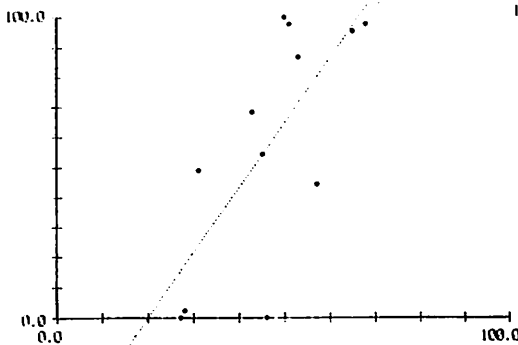


図5 三次産業(65名)の口蓋化

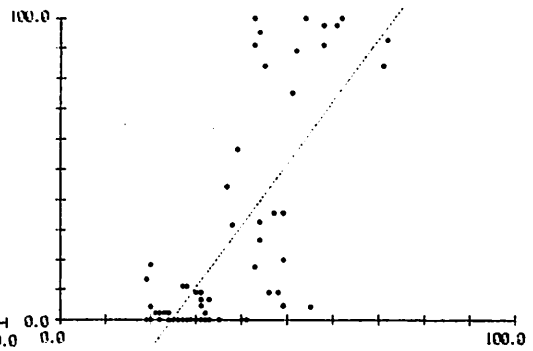


図6 男性(63名)の口蓋化

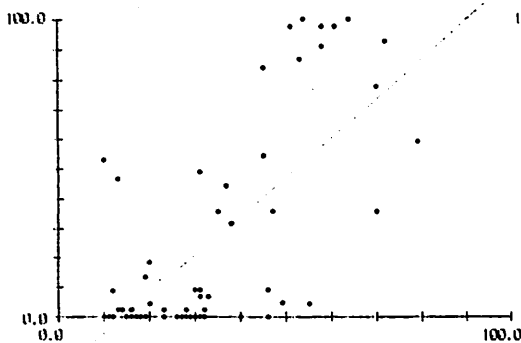
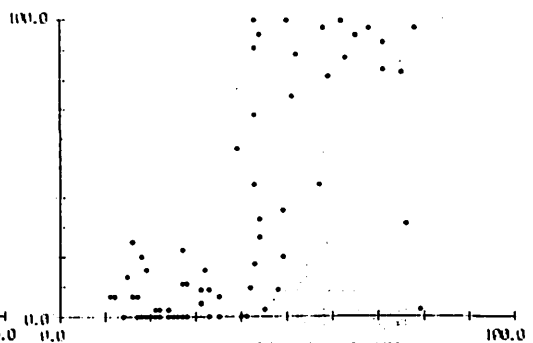


図7 女性(75名)の口蓋化



3. 2 核家族と共通語化

図2を見ると10代の若者にも50%前後のなまりを持つ者が2名だけいる。彼らの家族構成を調べてみると1名(10歳)は祖父(62歳)曾祖母(83歳)と同居しており、もう1名も祖父(77歳)祖母(73歳)と同居している。それでは一般に家庭内に高齢者がいることによって口蓋化が保たれやすいものなのだろうか。図8は10代の若者36人を対象に、横軸に本人と家庭内の最高齢者との年齢差をとって、なまりの分布を示している。なまり0%の者が多いのだが、全体として右上がりの傾向もまた認められる。相関係数(0.39)の検定をおこなうと両側2%で相関ありとの結果を得た($t=2.47$, $d.f.=34$)。また家族構成が核家族(家庭内に2世代以下)かそれ以外かでなまりの有意差を検定するとやはり2%水準で有意差が認められた(表3)。国研モデルでは「凸型」の若者世代が親となって育てた若者が「下降型」を生じさせると仮定しているが、その際、新しく形成される家庭が核家族であれば共通語化に拍車がかかるようである。

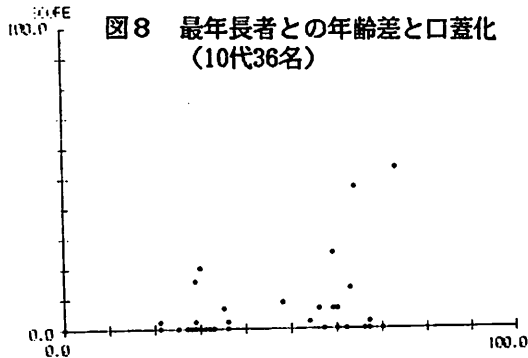


図8 最年長者との年齢差と口蓋化
(10代36名)

表3 家族構成と10代の若者の口蓋化

	標本数	平均値[%]
核家族	17	1.57
非核家族	19	10.88

3. 3 その他の社会的要因

フェイスシートで質問した項目についてなまりの平均値の差の検定(t-test および分散分析)の結果5%水準で有意差が認められた項目について簡単に報告する。

- (1) 学歴: 「旧制高等小学校卒」と他のすべての学歴の間に有意差あり。(ただし、対象は16歳以上。)
- (2) 母親の出身地: 「母親が賀露出身」と「県外出身」とで有意差あり。
- (3) 職業: 「漁業」と「学生」、「会社員・サービス業」と「無職」、「学生」と「無職」、「主婦」と「無職」の間に有意差あり。(ここで無職とは職業を引退した高齢者である。)
- (4) TVの一日視聴時間: 「1時間以内」と「4時間以上」とで有意差あり。

最後に項目間の相関を考慮に入れた分析をおこなうために性別、年齢、職業、学歴の4項目から数量化理論I類で口蓋化の値を予測してみた。結果の概略は右に示すとおりであり、各要因がどれほど予測に効いているかを示す尺度である偏相関係数を見るとやはり年齢が圧倒的に効いていることがわかる。予測全体の尺度である重相関係数も高い。「階段型」の変化が生じている以上、年齢を知るだけで口蓋化率をかなり予測でき

要因	単相関係数	偏相関係数
性別	0.083	0.111
年齢	0.820	0.772
職業	0.219	0.282
学歴	0.369	0.184
重相関係数	0.838	

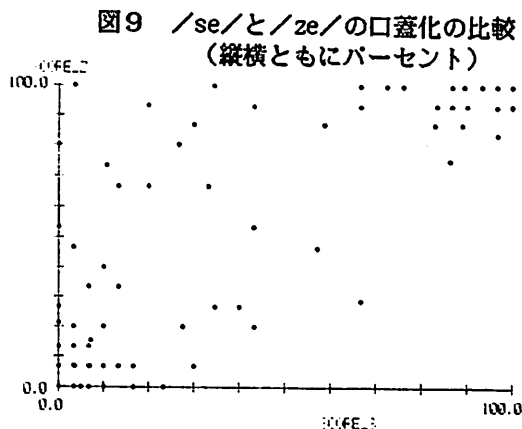
るのは当然といってよい。

4. 言語的要因の分析（語彙の分析）

以下では言語体系に関する各種の要因が個々の語彙の共通語化の進展にどのように関係しているかを分析する。以下で論じる要因は表2に言語的環境として示したものであり、ここで説明を加える。(1)「声」は/se/か/ze/かの別。(2)「語種」は和語か漢語（和製漢語を含む）かの別。(3)「文字」は音節がリスト上で書かれていた文字の別。(4)「前の音」は/se/・/ze/の直前に位置する音節主音の別（井は文頭の意味）である。この他に「後の音」「品詞」「文節の切れ目」等を分析したが「なまり」の平均値に統計的に有意な差を見いだせなかった。

4. 1 /se/・/ze/のちがい

両者間には1%水準で有意差が認められる。図9は個人単位に/se/の口蓋化率（横軸）と/ze/の口蓋化率（縦軸）の関係を示しており、大多数のインフォーマントが/se/よりも/ze/の方を口蓋化して発音する傾向にあることを示している。この問題については以下の5でもう一度とりあげる。



4. 2 和語・漢語のちがい

/se/に関してだけ、5%水準で有意差が認められる（/ze/も10%水準ならば有意差あり）。和語の方が口蓋化率が高くなっているが、これには後述する「前の音」との関係も絡んでおり、注意が必要である。

4. 3 リストの文字表記によるちがい

他の要因に較べると異質であるが、調査に及ぼした影響を知る必要があるので便宜的にここで取りあげる。/ze/に関してだけ、仮名で表記された項目と漢字で表記された項目の間に2%以下の水準で有意差が認められた。表音文字である仮名で表記された場合に口蓋化率が低い。

4. 4 前の音によるちがい（分散分析による）

/se/に関してだけ1%以下の水準で有意差が認められた（/ze/は前の音の種類が少ないので検定からはずした）。Bonferroniの基準による対比較の検定をおこなうと、/u/と/a/, /u/と/N/の間に5%水準で有意差がある。また有意差は認められなかったが、/u/と同じ奥舌母音である/o/の場合にも口蓋化率が高くなっていることは注目すべきだろう。[s]を発音するためには前舌面を歯茎に接近させねばならないが、直前の母音が奥舌であることによってこの運動が阻害される可能性が考えられる。

4. 5 複数の要因による予測

上に取りあげた要因から「文字」をはずした3種の値で個々の語彙の口蓋化率を予測することを試みた。右に数量化理論I類の結果の概略を示す。語種の偏相関係数が

要因	単相関係数	偏相関係数
声	0.444	0.639
語種	0.156	0.079
前の音	0.333	0.564
重相関係数	0.691	

低い、これは語種と前の音の間にあった相関が取り除かれた結果と考えられる。

前の音が /u/ である項目は「布勢」(2回)「許せる」「勤めているせいで」の4項目であり、すべて和語に分類されるので、単独の分析(4.2)では和語の口蓋化率が見かけ上高くなっていたものと考えられる。

5 まとめと今後の課題

鳥取市賀露町における /se/・/ze/ の共通語化の特徴をまとめる。まず話者の属性に関しては、戦後生まれの(40歳以下)世代で会社員やサービス業に携わる者、特に女性が急激な共通語化の担い手となって「階段型」の変化を示すことが判明した。このような変化の型は鶴岡では認められておらず、鶴岡と賀露とでは、口蓋化に関する限り、異なった共通語化のモデルをたてる必要があるように思われる。ただし、両調査を比較するにあたっては次の三点で注意が必要である。第一に鶴岡調査の結果は常に世代毎の平均値で示されているので個人単位に分解して再分析すれば異なった結果が得られる可能性がないわけではないこと。第二に鶴岡調査の母集団は鶴岡市全体(15歳以上、1971年で67,780人)であるのに対し、賀露の母集団は鳥取市のなかの狭い地域社会が選ばれていること。第三に両調査の間には16年の時間差があること。特に第二点は重要である。鳥取でも市民全体を母集団とした場合には鶴岡と似た結果を得る可能性があり、また逆に鶴岡でも特定地域に限って再分析すれば賀露のような結果が出る可能性がある。言語地理学に比喩を求めれば鶴岡調査は広域言語地図、賀露調査は微細言語地図に相当するといえるのではない。核家族の若者の共通語化については第三点が問題となるだろう。

次に調査語彙の言語的屬性に関しては /se/ と /ze/ とで共通語化の進展に大きな差が生じていることが判明した。ちなみに鶴岡でも1950年には「背中」(75.9%)「汗」(79.9%)に比べて「税務署」(48.5%)の共通語化が大きく遅れていたが、国研(1974, p.121)ではこれを説明するにあたって「『ゼイムシヨ』は公式的な語ではあるが、前回調査当時では日常の言語生活の中で用いられる頻度が極端に少ないため、いざそれを実際に共通語の音声で発音しようとする場合に困難さの度合いが高かったのではなかろうか。」と理由をもつばら調査語彙の言語生活上の特性に求めている。しかし、賀露では /se/ と /ze/ の共通語化の差が一般的な音声の条件によるものであることは間違いない。つまり /se/・/ze/ の共通語化はまず /se/ が先行し、/ze/ がこれを追いかける形で進む。鶴岡の結果もこのように解釈し直すことができるのではなかろうか。

その他の言語的要因では「前の音」が今後の問題として残る。今回用いたリストの音声環境はかなり限られたものであるし、また今回はリストの文面を分析しているだけで個々の発話レベルの問題を捨象してしまっている。従って今は /u/ が共通語化を遅らせるという一般的な結論を引き出すことに躊躇を感じざるをえない。

これまで多くの成果を挙げてきた共通語化の研究は話者と社会との関わりを分析する方向で(国研の報告書にある「言語生活」の語はこの意味であろう)進められてきた。今後は言語そのものの中に共通語化を律する要素を求める方向があわせて必要となる。

参考文献

- 国立国語研究所(1953) 地域社会の言語生活 一鶴岡における実態調査一
- 国立国語研究所(1974) 地域社会の言語生活 一鶴岡における20年前との比較一
- 北海道方言研究会(1978) 共通語化の実態 一北海道増毛町における3地点全数調査一

今回発表した各種の統計処理は プログラムライブラリ HALBAU(Ver.2.55)によった。

表2 調査語彙とリスト中での音語的環境

番号	文脈	口蓋化[%]	声	語種	文字	前の音
1	学校の先生	21.6	無声	漢語	漢字	o
2	学校の先生	20.9	無声	漢語	漢字	N
3	話したら、先生が	20.1	無声	漢語	漢字	a
4	話したら、先生が	19.4	無声	漢語	漢字	N
5	布塾の山王さん	26.6	無声	和語	漢字	u
6	布塾に習いたころ	32.6	無声	和語	漢字	u
7	顔も背中も	33.3	無声	和語	漢字	o
8	背中也迂びっしょり	26.9	無声	和語	漢字	o
9	全然迂もかかない	24.6	無声	和語	漢字	a
10	上945年	25.8	無声	漢語	数字	#
11	強い因光	31.2	無声	漢語	数字	i
12	変化させ、推定で	25.4	無声	和語	漢字	a
13	犠牲となつた	25.0	無声	漢語	漢字	i
14	20世紀における	26.0	無声	漢語	漢字	Q
15	人類の生活に	35.7	無声	漢語	漢字	o
16	戦後四十年の	21.7	無声	漢語	漢字	#
17	いや、世界平和へ	25.8	無声	漢語	漢字	a
18	悲惨な戦争の	22.1	無声	漢語	漢字	a
19	先日、風邪を	24.1	無声	漢語	漢字	#
20	飲ませてもらった	25.0	無声	和語	仮名	a
21	飲みたいとせがんだ	26.3	無声	和語	仮名	o
22	いけません	20.4	無声	和語	仮名	a
23	逆に説教されて	24.1	無声	漢語	漢字	i
24	激しいせいかも	27.2	無声	和語	仮名	i
25	まだ許せるが、	43.5	無声	和語	仮名	u
26	せっかく料理して	30.4	無声	和語	仮名	#
27	食べるのが盃一杯	25.4	無声	漢語	漢字	a
28	勤めているせいで	34.1	無声	和語	仮名	u
29	問題に世間の人より	22.1	無声	漢語	漢字	i
30	私は全然汗も	28.1	有声	漢語	漢字	a
31	私は全然汗も	31.6	有声	漢語	漢字	N
32	たが、せいぜいして	28.1	有声	和語	仮名	e
33	ぜいぜいして	29.7	有声	和語	仮名	e
34	なので、あざ道で	29.4	有声	和語	仮名	e
35	完全に破壊された	39.2	有声	漢語	漢字	N
36	風邪をひいたので	29.0	有声	和語	漢字	a
37	かき混ぜて	29.0	有声	和語	仮名	a
38	金快してから	29.4	有声	漢語	漢字	#
39	から、せびもう一度	29.2	有声	漢語	仮名	a
40	風邪をよくひく	33.6	有声	和語	漢字	a
41	ごほうは絶対に	39.9	有声	漢語	漢字	a
42	私は撥務署に	37.0	有声	漢語	漢字	a
43	売上控問題	32.1	有声	漢語	漢字	e
44	アセ(汗)	27.0	無声	和語	INTV	a
45	カゼ(風邪)	27.0	有声	和語	INTV	a

注：(1)下線部分をとりあげている。(2)「文字」宛にINTVとあるのは語彙に関するインタビューでとりあげた項目。

APPENDIX 1

「前の音」による /se/ の分散分析結果

平均値の変動

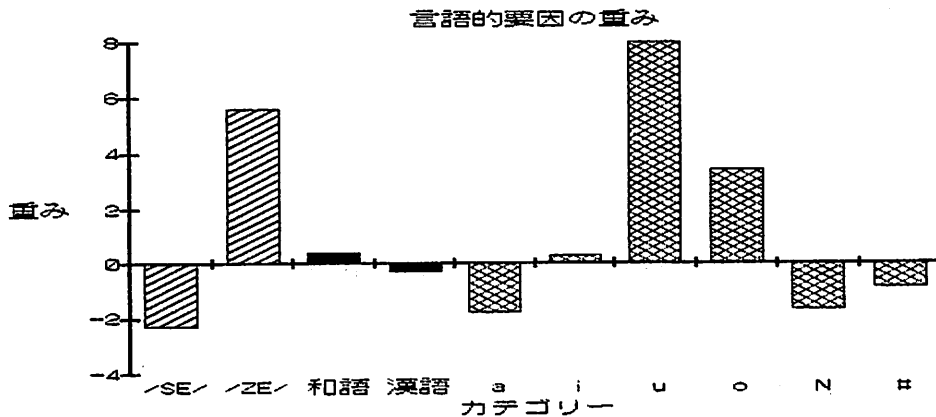
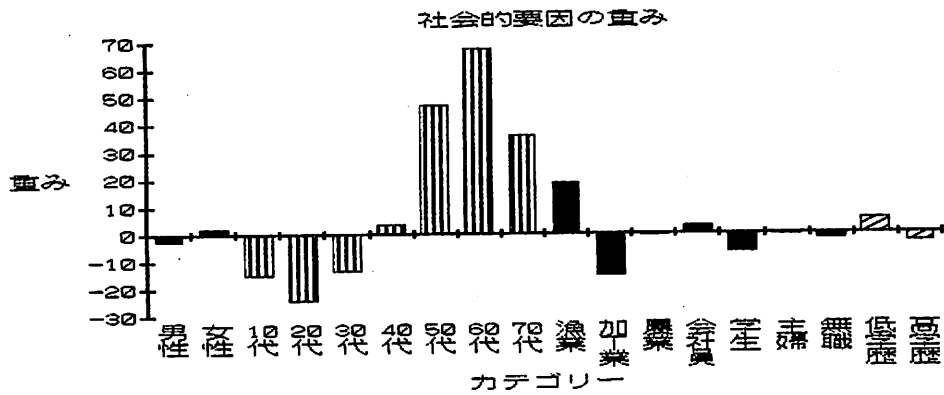
前の音	標本数	平均値	S D
a	11	24.5	2.41
i	5	25.9	3.11
u	4	34.2	6.06
o	4	29.2	5.60
N	2	20.2	0.75
#	4	25.5	3.18
全体	30	26.5	5.24

分散分析表

要因	変動	自由度	不偏分散
級間	396.4	5	79.28
級内	425.7	24	17.74
全体	822.1	29	28.34
F=4.470 (p=0.005)			

APPENDIX 2

数量化理論 I 類による分析結果
(各要因のカテゴリの数量)



訂正と補助資料

口蓋化した /se/・/ze/ 音節の共通語化に関与する要因について
---- 鳥取市賀露町の社会言語学的調査から ----

前川 喜久雄
池本 伸子

訂正(1) 原稿集16ページの表2に関して

	誤		正
イ) 「番号8」の「前の音」を	o	→	a
ロ) 「番号34」の「前の音」を	e	→	a
ハ) 「番号26」の「語種」を	和語	→	漢語

訂正(2) 原稿集17ページの APPENDIX 1 「平均値の変動」の表に関して

	誤		正
イ) 「a」の「標本数」を	11	→	10
ロ) 「全休」の「標本数」を	30	→	29

補助資料(1) 「階段型」の共通語化からの外れ値について

原稿集12ページの図2には階段型の共通語化にあてはまらないデータ、統計学で言う「外れ値 outlier」が認められる。付図1のA~Gは①30歳未満で口蓋化率40%以上、②50歳以上で口蓋化率50%以下、を基準に選んだ外れ値である。このうち①に関するAさん、Bさんについては原稿集3. 2で分析しているの
で、ここでは②に関する5名の方の社会的属性について分析する。

Cさん: 57歳、女性、小卒、農業、賀露生まれ
外住歴なし

Dさん: 70歳、男性、高小卒、元警察官、賀露生まれ
16歳~23歳まで東京で生活

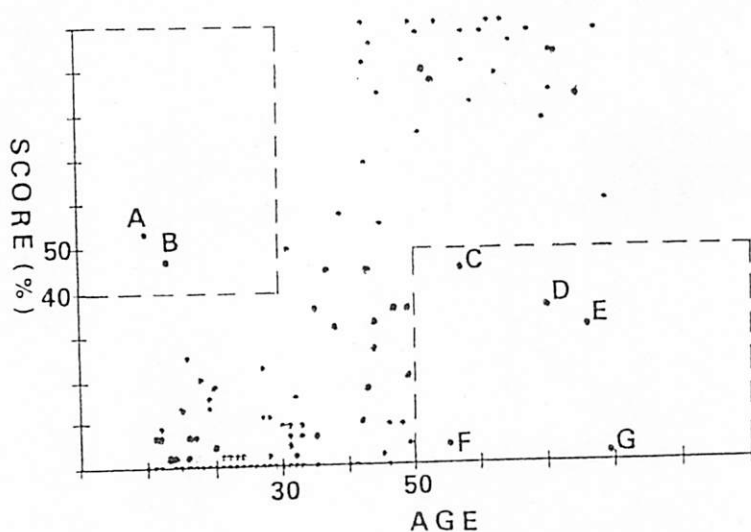
Eさん: 76歳、女性、高等女学校卒、主婦、賀露生まれ、
20歳~35歳まで東京・川崎・横浜で生活

Fさん: 55歳、男性、大学卒、会社員(TV会社技術部長)、賀露生まれ
10歳~12歳まで大阪、大学時代は京都で生活

Gさん: 79歳、女性、高小卒、主婦、鳥取市岩坪生まれ
昭和40年より賀露で生活

Cさん、Gさんに関しては共通語化を促すような社会的属性を発見できないが、他の3名は、外住歴、学歴などが関係したようである。Dさん、Eさんは言語的に柔軟な10・20代に首都圏での生活が長い。Fさんは同年代では学歴が高く、社会的な地位も高い。原稿集3. 1で述べたように地域社会全体としては外住歴や学歴と共通語化との関係が認められないが、この3名の場合は稀な条件の重なりによる例外と考えるのが妥当だろう。

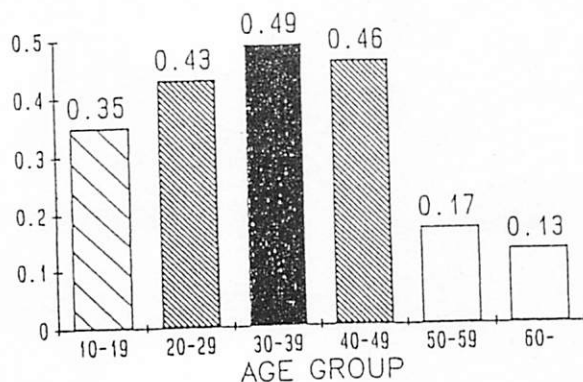
付図1 「階段型」の共通語化からの外れ値



補助資料(2) 「前の音」が共通語化に及ぼす影響と年齢との関係

原稿集4.2およびAPPENDIXでは全員のデータから「前の音」の影響を分析したが、その後、「前の音」の影響と年齢との間に強い関係が認められることが発見された。付図2は年代毎に計算した相関比(correlation ratio)の変動である。ここで相関比とは調査項目間の口蓋化率の変動(総分散)のうち、どれだけが「前の音」による変動(級間分散)によって占められているかを、級間分散÷総分散で示した値であり、項目間の変動すべてが「前の音」によって説明できれば最大値=1をとる。付図2を見ると、階段型の共通語化が始まる40代以下において相関比が急に大きくなっていることが分かる。原稿集に述べた「前の音」の影響は専らこのグループによってもたらされたものである。

付図2 年代と「前の音」が及ぼす影響(相関比)



注：棒グラフの様子は年代毎の分散分析の結果を示す。
 黒：1%で有意 濃斜線：5%で有意 淡斜線：10%で有意